

Title	訳読・音読へと続く「素読」の歴史的変遷
Sub Title	The historical transition of "sodoku" and the corresponding effects on English language education in Japan
Author	平賀, 優子(Hiraga, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.11, (2014. ) ,p.25- 46
JaLC DOI	
Abstract	Recently, ondoku (reading aloud) has been receiving considerable attention in the field of English language education in Japan (e.g., English Teacher's Magazine: 2012). Can we consider this as a revival of sodoku, which had commonly been used for kangaku (the study of the Chinese classics) between the Edo and Meiji periods? Is sodoku comparable to ondoku? As Naka (2002) points out, the literature on the use of sodoku for English language education is limited. The dictionary definition of sodoku is "reading aloud without deeply understanding," and it seems that there is no question about this. However, the definition of this term and its aims have been changing with the times: kangaku, rangaku (the study of Western sciences by means of the Dutch language), Eigaku (the study of Western sciences by means of the English language) and the current English language learning. In this essay, I will focus on the historical transition in the meaning of sodoku and the corresponding effects on English language education in Japan.
Notes	研究論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20140000-0025">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20140000-0025</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 訳読・音読へと続く「素読」の歴史的変遷

平賀優子

## Abstract

Recently, *ondoku* (reading aloud) has been receiving considerable attention in the field of English language education in Japan (e.g., *English Teacher's Magazine*: 2012). Can we consider this as a revival of *sodoku*, which had commonly been used for *kangaku* (the study of the Chinese classics<sup>1</sup>) between the Edo and Meiji periods? Is *sodoku* comparable to *ondoku*? As Naka (2002) points out, the literature on the use of *sodoku* for English language education is limited. The dictionary definition of *sodoku* is “reading aloud without deeply understanding,” and it seems that there is no question about this. However, the definition of this term and its aims have been changing with the times: *kangaku*, *rangaku* (the study of Western sciences by means of the Dutch language<sup>2</sup>), *Eigaku* (the study of Western sciences by means of the English language) and the current English language learning. In this essay, I will focus on the historical transition in the meaning of *sodoku* and the corresponding effects on English language education in Japan.

## 1 はじめに

近年、日本の英語教育における訳読批判が高まる中、コミュニケーション重視の指導法の1つとして実践しやすい「音読」の効用が注目され、「音読ブーム」とも言われているようである<sup>3</sup>。そしてこの音読の原点として「素読」が挙げられ、音読の歴史的な意義も唱えられている。日本の英語教授法の歴史を振り返る際、「素読」「訳読」「会読」と言えば、その出発点としてあまりにも有名であるが、「素読」は現代の英語教育における「音読」と平行に考えてよいのだろうか？実は英語の素読について、それはどのようなものか、詳しく論じられた文献は意外にも少ないことは中(2002)などにも指摘されているとおりで。本文中でも述べるが、素読とは、「内容の理解は二の次にして、文字だけを声に出して読むこと」(大辞泉)と定義されており、これに関しては一見すると疑問の余地のないように感じられるが、種々の資料

にあたって考えていくうち、そう単純な問題ではなさそうなことが分かる。漢学をその起源とする素読は、蘭学、英学へと受け継がれていったが、時代を経て「素読」という言葉が表すもの、そしてその役割が変容していることを見逃してはならない。素読の変遷史を追っていくうちに理解できたことは、素読はあくまでも訳読の前手で、逐語的に原文の意味を捉えることをその要としているということである。これが原文に忠実な日本語訳を施すべきであるという伝統的な日本の英語教育の考え方の源となっているのである。これに対し「音読」は、要約、意訳などにより「大意を把握」した上で正しい発音を習得するという、むしろこの両者は相対するものであるとも捉えられるのである。「音読」を闇雲に採用する前に、今一度これまでの歴史を振り返り、冷静にその功罪を理解しておく必要がある。

本論文ではまずはじめに漢学、蘭学、英学（これについては慶應義塾の資料をもとに）における素読の変遷を追い、それが現代の英語教育における音読にどのようにつながっていくのかについて論じた後、最終章ではそれぞれの相違点を分かりやすく表にまとめ、素読から音読に至る歴史の変遷が日本の英語教育に示唆するものは何か検討した。

## 1.1 素読の復活？！

2012年12月発行の雑誌『英語教育』において「音読指導の実践 Q&A」という音読に関する特集が組まれたのは記憶に新しい。その中で鈴木(2012)は、音読で養われる英語の力として、①発音力 ②リスニング力 ③理解を伴ったリーディング・スピード ④内容理解力 ⑤語彙・文法・構文の定着度 ⑥和文英訳や要約文の作成によるライティング力 ⑦口頭によるストーリー・リプロダクション力を挙げ、それぞれの先行研究とともに紹介している。上記のうち①と②については、現在のシャドーイングと通じるところがあり、CDやDVDなどから英語母語話者の発音が容易に聞ける環境を前提としているものである（シャドーイングについては5.2項でもふれる）が、③以降、特に④や⑤に関しては、江戸時代からの我が国の洋学の伝統である「素読」の効用でもあると言えよう。国語教育において、安達(1986)や齋藤(2001)によって素読が見直されるようになったが、その影響が英語教育にまで及んだことは、齋藤・斎藤(2004)が論じている通りである。ここでは「素読・暗唱・反復練習」が勧められているが、その後、Focus on Formの流行とあいまって、「訳読より音読を」という考え方になり、「型」が身につく～「音読して楽しむ～」「声に出して読みたい～」と題する英語のテキストが多数出版された。いつしか「素読＝音読」と理解されるようになり、あまり疑問視されてこなかったが、ここで改めて素読と音読について整理しておく必要があると考える。

## 1.2 素読とは

さて、「素読」の定義についていくつか調べてみると、

『大辞泉 第二版』小学館

書物、特に漢文で、内容の理解は二の次にして、文字だけを声に出して読むこと。すよみ。

『日本国語大辞典 第二版』小学館

書物、特に漢籍の意味・内容を考えることなく、ただ文字だけを音読すること。そよみ。すよみ。

『日本大百科全書 第二版』小学館

漢文学習の一方法。漢文学習法には、文字の順序に従って音読みする直読と、日本語に読み下す訓読とがあり、素読はこの訓読の一法であるが、その意味や内容は二の次とし……ただ口調のおもしろさに応じて暗唱し、読了する。記憶力の旺盛（おうせい）な幼若初学者には、漢文口調のおもしろさは格別で、それにつられての熟達も速く、素読はそれなりの効果があったが、明治以後の漢文学習には、そののんびりとした性格から、すっかり廃れた。「読書百遍、意自（おのずか）ら通ず」というのはこの漢文素読法の賞揚に通じる。

（下線は筆者）

とある。3つに共通して分かることは、素読は「意味を考えることなく、漢文を声に出して読む」ことである。つまり、「音読」との違いは意味を考慮するか、考えないかの違いであるように一見すると考えられる。「素読」はそもそも漢学に使われる言葉であるとする、英学への応用はいかにしてなされたのであろうか？「英学の素読」とは、いかなるものか？方法や目的の変化の有無を調べるため、まずは、漢学における素読から見ていくことにしたい。

## 2 漢学における素読

### 2.1 素読は訓読み？

前項で掲載した『日本大百科全書』の定義によると、「素読」とは、漢文を日本語に読み下す「訓読」の一法であるという。漢学の時代、荻生徂徠などは、漢文を訓読することで漢字そのものの意味が日本語における解釈になってしまい、原文の正しい理解ができないと、漢文訓読を批判し、音読みで語順を変えずに読む素読を謳っていたことは茂住（1993）などに詳しく論じられている。安達（1986）にも、素読の方法として、訓読みと音読みの両者が挙げられて

いる。しかしながら、辞書的な定義からすると、「素読は訓読み」が通例であることが分かる。また、漢学時代の素読の回想録からもそれが裏付けられる。たとえば、坪内逍遙の回想（『逍遙選集 第12巻』（1977）より）には、

私が受けた漢籍の教育は、十二分の厭気と怯え気とを以て、……審判官は手に持っている尺何寸もある竹の字突き棒で、見台の端をぴしりっ！

其のたびに子羊の左右の腕は覚えず肩ぐるみびくっとする。さ！「子曰ク然ラズシテ罪ヲ天ニ獲レバ禱ル所ナキナリ」さ、もう一度！ (p.10)

その他、湯川秀樹の回想（湯川：1960）にも、

「子、曰く……」

私は祖父の声につれて、音読する。

「シ、ノタマワク……」

素読である。

(p.46)

原文である漢文を日本語の語順で、日本語の読み方で読む読み方が素読であるとする、漢学時代の素読と現在言われているところの音読（音読については第5章で後述）は明らかに異なることが分かる。さて、次項では江戸時代当時の素読の目的について考えてみたいと思う。

## 2.2 素読は暗記が目的

辻本（2011）は、素読の目的は暗記することであると以下のように論じている。

素読は、中国古代の古典を、意味理解もともなわないまま、声に出して丸ごと暗唱するだけの学習である。その意味で、素読はテキストを読む、つまり「音読する」行為と、一見して同じに見える。しかし素読の目的はテキストの意味を理解することではなく、声に出して繰り返し読むことでテキストを「暗記する」ことのうちにある。 (p.183)

そして素読は「ただ機械的に古代古典漢籍である経書を、訓読体漢文という独特の文体（言語）に置き換えて身体化する学習」（p.186）であると言う。さらにこの「訓読体漢文」は、日本語の文法に従って送り仮名をつけ、日本語の文脈に置き換えられているので、一種の「日本語化された文」であり、これが、暗記しやすいようにリズムや抑揚などに工夫が凝らされているため、「身体化—テキストを丸ごと身体のうち埋め込んでいくこと＝暗記に適した

言語」であると説明している。

また、素読がなされていた当時の回想録をみても、素読をして、暗記をしていたことがうかがえる。たとえば、

片山潜『自伝』より

『大学』だの『論語』の素読を教はって、之を永く覚えて居ることが出来ない。直ぐに跡形もなく忘れて仕舞ふ。……ただ無意味なる素読を機械的に記憶して居ることは何うしても出来なかつたのである。 (片山, 1923: 85-6)

鳩山春子『自叙伝』より

私は学校入学前に漢学の先生の所へ参りましたので初学の人より勿論よく出来ました。それで論語や孟子の素読は暗唱するやうに覚えて居りましたが詩経や書経はむづかしくて覚えにくいやうに思ひました。 (鳩山, 1929: 22)

上掲の二つの回想に、「素読を記憶する」あるいは、「素読を暗唱する」というような記載が見られるが、このような言い回しをすることから考えてみても、素読が原文ではない、つまり、通常は音読みではなかったことが分かる。辻本 (2011) が言うように、「音読みの素読」は、暗記に適さない、ということになり、音読をしてしまうと暗記をするためという目的とは乖離してしまうのであろう。

## 2.3 課程としての素読

素読の目的は、江戸時代の寺子屋における教育課程からもうかがい知る事ができる。武田 (1969) によると、まず、素読課程 (7, 8 歳から14, 5 歳)、自読課程 (15, 6 歳) というものがあり、これらの課程ではとにかく読み方を習得する。そして次の講義課程ではじめて、暗誦した経書テキストの一字一句に意味が与えられ、解釈が加えられる。そして、会業 (会読、輪講) といういわゆる共同学習の段階へと続く。テキストの内容があまりにも難しいため、とにかく読むことからはじめ、読めるようになってから意味を与えるというやり方である。素読と音読の違いとして、「意味を考えるか否か」ということが、辞書の定義の字面から錯覚してしまうことは前述したとおりであるが、素読は「意味を考えてはいけない」のではなく、内容の難解さから仕方なく、初学者は「読むだけ」とされただけであって、無論、上級になるにつれて、読むと同時に意味が解せるようになってくるわけである。すなわち、上級者は声に出して読む練習はするけれども、それは「素読」とは称されないのである。

### 3 蘭学における素読

前章では漢学の素読について、それが漢文の訓読体を暗誦することであり、特に初級者のための方法であることが分かったが、これはいかにして続く蘭学に応用されたのであろうか。オランダ語はもちろん「訓読み」できないので、漢学の素読とは明らかに違う事が推測されるが、暗記するためという目的は変わったのであろうか。

#### 3.1 蘭文の翻訳法

欧文の素読について研究している中（2008b）によれば、素読は欧文解釈法と密接な関係にあったという。つまり、漢文の素読は、あくまでも「何度も読んで暗誦するため」だったのに対し、欧文の素読になると、「内容を解釈する＝翻訳するため」に行われた。以下に、主に茂住（1989）からいくつか蘭語研究に関する資料を抜粋し、蘭文解釈の方法を見てみたい。

青木昆陽『和蘭和訳』（1743）

蘭文の構成単位をなす各々の単語にその漢訳語をあて（a）、語義を補うとか、語勢を助けると考えられる単語や用法不明の語はすべて助語として片づける（b）。そののちに訳語の部分を見直し、漢文のいわゆる白文に訓点を施して読んでいくのと同様の要領で蘭文全体の意味を把握、あるいは解読する（c）。（符号は筆者）

ik	ga	úýt	om	Bloemen	te	kýken
イキ	ガー	ウイトヲム		ブルウメン	テ	ケイケン

イキハ私ナリ。ガーハ行ナリ。ウイトハ出ナリ。ヲムハ 為ナリ。ブルウメンハ花ナリ（a）。  
テハ助語ナリ（b）。ケイケンハ 見ナリ。

コレハ、私儀花ヲ見ンタメニ出行可申ト云コトナリ。（c）

上掲の資料を見ると、蘭文解釈の方法が一目瞭然である。それぞれの読み方、逐語的に漢訳語をあて、それを漢学の素読の方法を用いて、返り点方式で日本語に置き換える、というものである。これは次の前野良沢、大槻玄沢にも受け継がれる。以下も同じく下線と（a）から（d）の符号は筆者によるものとする。

前野良沢 『和蘭訳箋』（1785）

オランダ語そのものに注意が払われるよう、オランダ文字、文章とその発音注、訳文とを別仕立てにした。翻訳方法（「蘭化亭訳文式」）として

- ① 蘭文を筆写 (a)
- ② 各オランダ語の下に訳字を当てる (b)
- ③ 訳字に返り点 (甲乙丙丁…) を付して翻訳の順序を示す (c)
- ④ 蘭文全体を通しての翻訳 (d)

「レットルコンスト / 題言 上」  
 Opregt Onderwijs in de  
 正 訓 ○  
 丙 丁

Letter Konst, (a)  
 字 学 (b)  
 甲 乙 (c)

切意 訳言 読法  
 字学ノ正訓 是書ノ題号也。(d)  
 インデ 助辞ナリ。下ノ言ヲ上ニ接スルナリ。  
 デ レッテルコンスト  
 オプレスト オンデルウエイ ス イン  
 △初学ノ為ニ読法を附シテ、以テ上口ニ便リス。

甲乙丙丁と順序が付されるようになったのは注目に値する。玄沢のものはどうであろうか。

大槻玄沢 『蘭学階梯』 (1783)

- ① まず単語をできるだけ数多く収集、かつ暗記をする (読み方と意味)
- ② 蘭文中の各語に適宜訳語 (漢語) を当て、その訳語のつながりや文章全体を通じた意味、読み方を師に質問する
- ③ 師の教えに基づいて、意味が通じるようになるまで各自塾中に籠って蘭文を熟読する

玄沢の蘭文解読法も昆陽や良沢の方法を受け継いだものであり、それぞれの蘭語に翻訳語をあて、日本語の語順に置き換えて文全体の意味を理解するというものであるが、最終的にこの日本語を「幾遍トモ無ク熟読暗誦スレバ、自然ニ氷積シテ・其義通ズルモノナリ」と論じている。このように漢文訓読法による蘭語解読法を継承した玄沢であるが、実のところ彼は「蘭語ヲ悉ク倭語漢語トシテ読ントスレバ、却テ其義ヲ失フコト多シ」とし、顛倒しない直読直解方式を主張していたことが同書の〈訳章〉に記載されている。玄沢がそのような書きたいきさつ等については、茂住 (1989) が、「かつて遊学した長崎蘭通詞の学習法、あるいは当時の徂徠学における「唐音直読」の方法などの影響」(pp.54-55) もあると推測しているが、どちらにせよ、村田祐治の『英文直読直解法』(1915) や浦口文治の『グループ・メソッド』(1927) が提唱されるはるか100年以上前の蘭学の時代に、すでにこのような逐語的な返り読みを批判する意見があり、平易な蘭文は直読するように提唱されていたことは、ここに特筆しておくべきであろう。



さて、この時代にこのような「蘭語解釈法」が確立されたようであるが、外国語学習環境としてはまだまだ整ってはいなかった。上掲の蘭学書のいずれも文法の難易度に配慮がなされておらず、語学の教科書と呼べるものではなかったことは、中(2008a)が「未知の言語への入門に適した書物であるというよりは、ともかくも意味の通じる外国語の例文をひとまず列挙し和訳を与えたという印象」(p.59)であると述べている通りである。当時はまだ完全な辞書はなく、文章を読んでいきながら、新出の単語を集めて自分で単語帳を作成していた。依然「オランダ語の文章構造を理解するという事より先に、まずは逐語訳を施し、語彙を覚え、あとは「読書百遍意不ずから通ず」式の意味解説法を用いていた」(中, 2008a:60) 時代であるが、その後、文法の研究が盛んになっていき、蘭学の方法に大きな変化が出てくる。次項でそれについて触れていこうと思う。

### 3.2 文法的蘭語習得法

文章構造というものが認識されていなかった頃の蘭学は、蘭文の一字一句に逐語訳を施したのち日本語の語順に置き換えて訓読し、意味解釈を行うことが素読の目的であったわけであるが、1800年頃より次第に蘭語の文法研究が開始され(沼田:1989)、素読にも進歩がみられるようになる。まず、中野柳圃が『和蘭詞品考』(1801)、『助詞考』(n.d.)『蘭学凡』(1824)などでオランダ語に品詞があることを指摘した。そして弟子の馬場佐十郎による『訂正蘭語九品集』(1814)以降も引き続き熱心に文法研究に関心が払われたと同時に和蘭商館長ゾーフによる蘭日辞典、いわゆる『ゾーフ辞書』の編纂も開始され、蘭語学習の環境が一変した。例えば、玄沢の後継である宇田川玄真の塾「宇田川塾風雲堂」では、入門期に文法に基づいた句読を授け、これを素読させた後、蘭文の構造、意味を説明する方法がとられるようになったと言われているし、良沢の系統である藤林普山の『蘭学逕』(1810)をみても、蘭文中における主語・述語の関係や、各品詞の働きを理解させるように文法に基づいた訓点(筆者下線部)が分かる。

De	milt	is	een	rood	of	bruinachtig
	<u>脾ハ</u>	<u>也リ</u>		<u>赤</u>	<u>又</u>	<u>闇様</u>
		二				

en week	deel,	het	welk	zich	gemakkelyk
<u>而軟ナル</u>	<u>物</u>	<u>此レ</u>	<u>自ラ</u>	<u>易シ</u>	
	一			四	

laat van een scheiden,

為 を 分解

三 二 一

蘭語に漢訳語のみをあてていた時代のものより、主語・述語等、格段に文構造が理解できるようになっていることがうかがえる。文法的蘭語習得法については、玄真の門下である坪井信道の安懐堂における蘭学の方法からも裏付けられる。すなわち、ここでは原書の蘭文法教科書『ウエランド小文典』を使用して①初学者はまず塾師に文法法則に即して「句読」を授けられ、②続いて授けられた句読に従って蘭文を繰り返し読み、それを何十回となく反復させ、③蘭文に慣れてきたところで塾生は簡単なオランダ語文法の教授、講釈を受けたのち、会読課程へと進むという方法である。ここでも文法に即した句読が授けられていたことは確認できたが、実際にこれを読む際の具体的な読み方とはいかなるものであったか。

### 3.3 具体的な読み方

具体的な読み方について、日野（2008）は素読の三形態として以下のように説明している。まず、①音読みする素読 eg. 読経 があり、次に②訓読みする素読 eg. 漢文教育 そして最後に③は①と②の折衷として、たとえば“I have four books.”を「アイ 私は フォー 四冊の ブックス 本を ハヴ 持っている」という読み方を挙げている。日野によると、「反復音読」という点で、3つは共通であるということである。漢学の際の素読としては②が通例であることは前述したとおりであるが、欧文になると一般に③のような文選読み（伊村：2003）という読み方が行われるようになったと言えよう。これに関しては茂住（1989）も中（2002）も同様の見解である。これは箕作阮甫の蘭文の読み方をみても分かる。

福地源一郎の回想『箕作阮甫』（1914）より

デ・ウオールデン詞がウエルケそれはヘト・サーメンステル、

エーネル・ターレ国語のサーメンステル組立を

オイトマーケンなす所のウワールデン詞がセイン・ハン・

オンデルシケーデネン種々のアールド性質のものでセインある

エンさうしてダラーゲン・フルシキルレンデ種々のベナーミンゲン名付けを

ダラーゲン持つ

De woorden welke het zamenstel eener tale

uitmaken zyn van onderscheidenen aard, en

dragen verschillende benamingen.

漢訳語の並べ替えにより何とかして日本語に翻訳していた時代から見ると、文法研究の成果が素読に大きな進歩を生み出したことが改めて理解できる。

### 3.4 逐語訳批判

素読の特徴である、顛倒して読むことに対する弊害について、玄沢が以前に指摘していたことは前述したとおりであるが、もうひとつの大きな特徴である逐語的に訳語（難語句）をあてていくことについては緒方洪庵が批判していた。洪庵の塾（適塾）において、どのような指導法が実践されていたかを福沢諭吉が回想しているので、それを見てみよう。（下線は筆者）

福沢諭吉の回想 『福翁自伝』（1899）より

初学の者には先づ其ガランマチカを教へ、素読を授ける傍に講釈をもして聞かせる。之を一冊読了とセインタキスを又其通りにして教へる。如何やら斯うやら二冊の文典が解せるやうになつた所で会読をさせる。

洪庵は、適塾において師坪井信道の蘭学塾（安懐堂、3.2項参照）の方法を継承した。「会読段階に入る前に素読の傍ら講釈をもして聞かせ」という、上掲の福沢の回想の実態を調べるため、（適塾の塾則は今のところ見つかっていないため<sup>iv</sup>）緒方郁蔵が開いた適塾分塾の塾則を見ると、初級の生徒にはガランマチカの素読、講釈が行われ、次の段階で独習による会読が行われたということが確認できた。ここで初級の生徒に素読のみならず、講釈までが課せられていたということは、初級とはいえ素読に終始するのではなく、洪庵の思想からすると、一字一字の発音、逐語の意味を教え、一文の日本語訳を授けることよりむしろ講釈を重視していたのではと推測される。そもそも適塾における「素読」に関連した資料が非常に乏しいことから、素読が軽視されていたことが裏付けられよう。また、以下の資料からも、洪庵の指導理念が伺える。

「福沢諭吉全集諸言」『福沢諭吉全集 第1巻』（1958）

緒方先生は……其持論に曰く、抑も翻訳とは原書を読み得ぬ人のためにする業なり。然るに訳書中無用の難文字を臚列して、一読再読尚ほ意味を解するに難きものあり。畢竟原書に拘泥して無理に漢文字を用ひんとするの罪にして、其極、訳書と原書を対照せざれば解す可からざるに至る。笑う可きの甚だしきものなり云々とは、吾々門下生の毎に聞くところにして……

さらに、以下の引用からも、洪庵と福沢の「難解な漢字を使った意味不明の日本語訳」に対する批判がうかがえる。

「阿部泰蔵直話」(『資料日本英学史 1 下』, p.727)

福沢先生は緒方流儀で、意味を訳して早分かりのするのが宜い、翻訳は原書を読む人に見せるのでないから、読む人に分るやうにするのが肝腎だと言つて居られました。

つまり、洪庵の翻訳の主眼は、原文の大意をつかんで、平明に表そうとするところであった。翻訳は原書が読めない人のために行うので、逐語的に難語句をあてて翻訳するよりも、とにかく日本語として読んだときの内容の分かりやすさを重視した。これに対し、当時「東西学問の両大関」と言われた(上掲『福沢全集諸言』より)、西の洪庵に対する東の杉田玄白は、逐語的に難語句を使って、文の美的表現に主力を注いだのだと多田(1984)は言う。蘭学時代は、文法研究や辞書の編纂が進み、環境的にも整い始めたわけであるが、このような中で洋学に対する考え方も一様ではないのは当然のことといえる。上述の通り、福沢諭吉は師洪庵の考え方をほぼ継承し、「平明な日本語訳」には賛成していたことが分かるが、師の素読軽視・逐語訳批判に対しては懐疑的だったのではなからうかということが、彼の塾、慶應義塾の資料から明らかになってくる。このことを中心に、次章からは英学における素読について論じていきたいと思う。

#### 4 英学における素読

英文の素読の方法、つまり漢文訓読法としては中浜万次郎の『英米対話捷徑』(1859)が最初の文献であると言われている。漢学と違い、欧文を読むという意味では、素読の方法は蘭学と英学はさほど変わらなかったということは、茂住(1989)や中(2002)が指摘する通りであろうが、その目的という点ではどうだろうか。蘭学後期より始まった文法研究が進歩するに従い、暗誦というより蘭文解釈・翻訳練習のための素読という意味合いが強まってきたため、「意味を考えずに」読むという漢学時代当初の素読とははっきりと相違が出てきた。素読の段階で必ず日本語訳が与えられるようになったのである。さらに、つづく英学の時代になると「素読」という言葉それ自体の意味が薄まり、「素読課程」として会読の前の英文解釈の基礎を養う入門課程全般をさす、つまり広義に用いられるようになってきた。また、この時代、読書＝音読、つまり声に出して読むという習慣が、読書＝黙読へと移行してきたこととあいまって、意味解釈が目的である英学の素読に関しても、必ずしも声に出して行う必要性がなくなってきたと言えよう。

##### 4.1 慶應義塾における素読

中(2008b)は、慶應義塾では素読が重視され、それが意味解釈と密接な関係にあり、この解釈中心主義が明治以降の日本の英語教育のひとつの重要な柱になっていったと論じている。

以下、福沢の素読に対する考え方をみるため、慶應義塾創立当時の課程表や回想録等の資料を見ていく。

「慶応義塾之記」(1869)

文典并雑書素読 経済説略素読

クワツケンボス氏窮理書素読 ハイスクール

地理書素読……(同書の会読もあり)

まず、創立当時は初級者に関しては文典のみならず、専門書もすべて素読をしていたことが分かる。適塾関連の資料には「素読」という言葉の記述が非常に限られていることから、福沢は素読に関しては適塾のカリキュラム、すなわち洪庵の考えを継承しているわけではないことが図れる。慶應義塾における素読の主旨に関しては、以下の記載より明らかとなる。(下線は筆者)

「私学慶応義塾開業願」(1873) (教則 正則科)

一、 等外教師の法プライマリーリードル及第一リードルは暗誦せしむることなく素読のみを伝へ、時々盤上に既に読みたる語を記して其訳を答へしめ、或は訳を記して英語を答へしむる等、都て生徒に英語の訳を覚へしむるを主旨とし、第二リードルに至りては、講義を為し或は時々生徒にも読ましめ、英書の読方を知らしむるを要す。プライマリー文典、中等地理書、窮理初歩は今日講釈して明日これを暗誦せしむ。……

一、 リードルは都て暗誦することなく、唯読方解し方を会得するを主とす

ここに、「リードルは暗誦させることなく素読のみを伝える」と書かれていることから、当時のお素読と暗誦は対にして考えられていたことが分かる。文法という概念がなかった漢学の時代は「何度も繰り返して全文を暗誦することにより、解釈の方法をトップダウン式に、つまり機能的に学習したわけであるが、文法研究の進歩によりボトムアップ、つまり演繹的な文法学習ができるようになった。日本語訳を始めから終わりまで暗誦する必要があるとすれば、原書の「内容」を記憶する必要がある場合のみであるとするということであろう。そういった意味で、「リードル」に関しては暗誦がいらぬ、と言っているのである。暗誦のための素読ではなく、英語の(対)訳を覚えさせ、解釈の方法を習得させるための素読であると明言している。漢学の時代は意味を考えないのが素読であったことと比較すると、大きく変化していることが分かる。

須田辰次郎の回想『慶應義塾誌』（1922）

素読は五等の方々の受持ちにて一人の教師の前に二三脚の机を置いて五六人宛並むで教師が字指を以て一々字を突きて教へたり先づ読方（発音）を教へ後に訳語意味を教へ二三回繰返し生徒が自ら読み得るに至りて止む

上掲の資料に下線を附したとおり、この「一字一字」突いていく方法は、漢学の素読と変わらない。これが蘭文になると、一字一字に訳をつけていくことになる。そしてこの逐語的な（結果的に不自然な）日本語の訳こそ、洪庵が批判したところであるが、福沢は敢えてこれを取り入れた。洪庵は、そもそも翻訳は原書を原文のまま読めない人のために行うと考え、添削の時も原書を全く読まなかった訳であるが、裏を返せばあまり原書に書かれている文言を重要視していないということになる。これに対し、逐語的な訳をあてる素読を重視した福沢は、「原書に対して忠実」であったと言える。のちに、洪庵流の意識に注目するあまり、「中途半端な訳読」が出回っていると批判された意見（最終章、村井知至の回想を参照されたい）も出てくるが、福沢はあくまでも逐語的で原文に忠実な訳読を尊重したのではないだろうか。（ただ、福沢は素読を全面的に肯定していたわけではなく、漢籍の素読で子供を苦しめるのは「無益の戯れ」（p.5）であるとも『文字之教（第一文字之教）』（1873）に述べられている。）

素読の伝統が引き継がれたのはもちろん慶應義塾などの私塾だけではない。本項最後に当時の大学南校の規則を抜粋しておく。

「大学南校規則」（1870）

……正則生既に洋学を研究し独見の学力ある者は、正科の他、別に講習を授け其学力を助く。初学にして独見し能はざる者は素読を授け教官之を教授すべき事

素読が実施されていたこと、そしてそれはあくまでも初級者向けに行われていたことが分かる文章である。漢学時代の寺子屋においては、とにかく読み方を一字一字教えてもらう素読、一人で読む自読、意味を付ける講義課程を経て経読学習である会読段階へと進んだことは2.3項で触れたとおりであるが、この英学の時代には、素読・自読・講義をまとめて、会読の準備、つまり独看ができる能力を養う初級の課程の総称としてこれを「素読」と呼ぶようになったのである。換言すると、「素読」という言葉が広義に用いられるようになったということである。

#### 4.2 「素読」の消滅？！

さて、次に明治18年に改正された「慶應義塾社中之約束」（1885）を見てみると、「正科」の規則は以下の通りである。

正科の規則

	<u>「英書訳読」</u>	「英語」	(「数学」、「漢書」)
番外	<u>雑書素読</u>	スペルリング ペンマンシップ	
四番	地理学 動物学口授 パーレー万国史輪講	リージング ジクテーション	
三番	植物学 物理学口授	リージング ジクテーション	
:	カツケンボス氏 米国史輪講	コンベルセッション	

まず大きく変わったところは、「英語」という科目が別に設けられたところである。英学から「英語教育」への変化である。そして、「素読」という文字は、「英語」ではなく「英書訳読」の番外（初級者）で見られることも注目に値する。「英書訳読」はあくまでも原書の内容を把握することが最終目的であり、素読はその基礎として、「訳読の中の素読」という位置づけである。すべての専門書の素読があるわけではなく、「雑書」つまり百科事典のようなもののみの素読があり、そのあとは訳読のみである。（訳読については後述する。）従って「雑書素読」は内容が難しい原書を読む前に、辞書と文法書を使って独り看ができるようになるまでの慣らし、ということであろう。尚、正科のほかに別科も設けられていたようであるが、こちらは「英書訳読」と「翻訳（講義本を用いる）」からなり、「素読」はなかったようである。正科、別科とも毎期末に訳読（翻訳）の試験があった。翌明治19年改正のものもほぼ同じ内容である。このように、次第に専門書の素読がなくなり、初級者の雑書素読のみになり、その後素読という文言が消滅し、「訳読」がこれにとって代わって普及していくこととなる。英学における素読と訳読は、その方法と目的においてほぼ同義であるということであろうか。

## 5 英語教育における音読

次第に英学から「英語教育」の時代へと移行し、素読という言葉が訳読にとって代わられるようになってきたことは前項最後に述べたとおりであるが、この「訳読」という言葉、そして「音読」について次に考えていきたいと思う。

### 5.1 「音読」「訳読」の出現

正則と変則という言葉は、明治時代に入り種々の文献に登場してくるが、それらがこの「音読」と「訳読」に関連している。例えば、三宅雪嶺の回想を見てみると、

『大学今昔譚』（1946）より

正則といふのは原語のままに音読し、少しも訳読しないのであって……小児のやうに覚えるわけに行かず、単に綴書を音読するのみで殆ど全く意義を解しない……

とある。正則＝音読であり、変則＝訳読の関係である。(慶應義塾における正則と変則は少し異なり、先に述べた正科、別科の意味合いで用いられている。これについては中(2002)等を参照。)江戸時代より、そもそも読書は声に出して読む、つまり音読が通例であったため、素読というと当然声に出して読むことが基本とされていた。唐木(2001)も、「奈良朝以来の写経、ヨーロッパ中世を通じての古典の筆写、寺院や修道院内での仏典や経典の読み方」は「身体的な行為とともに映像世界をともなったもの」であったと論じている。これが次第に「読書が黙読、しかも無個性な活字の黙読となり、しかもその場所が公共的でない書齋となった時、読むということの意味したものが変質してしまった」(p.54)と論じているが、そのことが外国語を学ぶ際にも影響を大いに与えたと言えよう。この読書＝黙読へと変化してきたこととあいまって(「音読」と「黙読」の歴史に関しては、柳沼(1993)に非常に詳しい)、英学の時代になると、英文和訳というその目的からいっても素読自体も声に出す必要性がなくなってきた。無論、素読課程は声に出して学習していたと推測されるが、「訳読」は黙読で行われるようになったため、ここで敢えて「声に出す」ことを「音読」として再注目するようになったのであろう。

そもそも音読と訳読の出発点はどこにあるのか。「音読」に関しては、明治4年(1871)の『新聞雑誌』16号に「『米国』より教師を招き音読は洋人に託し」と出てくる。正則英語教育が行われていた日新義塾に Alfred M. Mantell という米国人を雇用したという内容である。訓読みに対する音読みという意味ではなく、原文をそのまま声に出して読むという意味での「音読」は、これまで見てきたところ、この記述が初めである。明治期に入ると多数のお雇い外国人が来日し、明治7年当時で、総数503名(半分以上がイギリス人)だったと言うが(伊村:2003)、この音読がもたらした彼らに任されたわけである。蘭学の時代より、長崎の蘭通詞が会話(外国人との交渉)を、そして江戸の蘭学者が書物の翻訳をと役割が分けられていたため、(もちろんネイティブ教師の不足もあり)蘭学者に対する音声教育は重要視されてこなかったが、多数のネイティブ教師の雇用により、これが可能になったことは、我が国の外国語教育に大きな進歩をもたらしたことは言うまでもない。

さて、対する訳読に関しては、『日本教育史略』(1877)に「点図 漢文を訳読するためにテニハを加へ」と出てくる。その後、先に見たとおり、学校関係の資料にも多数登場してくる。拙稿(平賀,2005:14-18)で詳述したが、訳読というのは、広辞苑には「翻訳して読む」と説明があるが、まさしく本稿で見てきた素読の伝統を引き継いで出てきた方法であり、つまり、伊藤(1984)の言う、「漢文を読む方法を利用して、英語を日本語に訳す順序に返り点をつけ、一語一句もみらず訳す順に番号をふり逐語的に訳していく方式」である。では改めてここで、訳読と(黙読に対する)音読、素読の関係を図式化して整理してみたい。



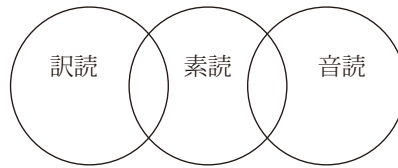


図1 訳読、素読、音読の関係

明治初年頃にはこの3つの言葉が共存していたが、訳読と音読の両方の要素を備えた素読は、明治中ごろより消滅してしまった。「訳読の中の素読」という位置づけについては先述したとおりであり、素読は初級者のみが対象であった。平明な文章は、その翻訳もいわゆる単語の日本語訳を日本語の語順に並べ替えただけの直訳で理解できるが、難解な原文となると、直訳をさらに意識して、内容を把握しなくてはならない。素読と訳読の違いはまずこの翻訳レベルにある。そして、逐語的に訳して読んでいくという意味でこの2つは共通しているが、訳読には「声に出す」という要素が含まれていない。

一方、素読と音読は「声に出す」ということは共通しているが、漢学の時代より、素読は訓読が通例であり、原文をそのまま読むということは、あまり見られなかった。これは、国内に母語話者もあまりおらず、テープレコーダーなどもなかった時代、実際の母語話者の発音を聞く機会が非常に限られていたためという、環境が原因とも言える。そして図1でも分かるように、訳読と音読は全く共通項がない。「逐語的に日本語に訳して読む」訳読と、「原音を訳さずそのまま読む」音読という、むしろ相対するものとして認識されるようになったわけである。そして、「訳読」の弊害が指摘され、冒頭で述べたとおり「音読」が脚光を浴びることになったのである。

## 5.2 音読の意義

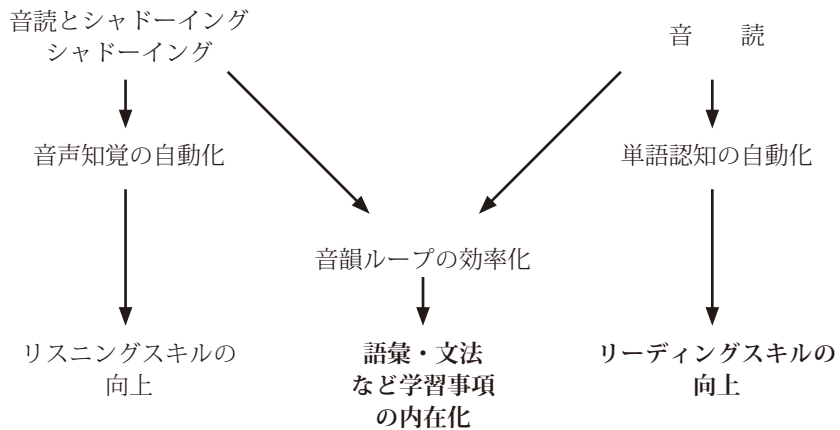
では、「訳読」に対抗する「音読」の意義はどこにあるのか。東谷（2012）は、

- ① 発音が磨かれ、イントネーションやリズムなども体得されるのでコミュニケーションの基礎技能が伸びる
- ② 「直読直解」の力が身に付き、英文の読解スピードが向上するとともに、音声データが構築されることでリスニング力も同様に伸びること
- ③ 単語や文法・構文、語と語のつながり（コロケーション）も定着するので、自己表現力・英作文力が向上すること

(p.19)

としている。そしてこの音読練習のためには音声 CD 配布することと、必ず内容理解の後に練習を行うことが注意点として挙げられている。素読・訳読と比較してみると、①に関しては、素読・訳読ではほぼ注意が払われず、②は全く逆で日本語の語順で返り読みをしていき、③に関して言えば、暗誦するまで繰り返すという漢学や蘭学の初めごろの素読とは一致するものの、訳読とは異なる。

この音読に関して、最近では中でもシャドーイングが注目されている。音読とシャドーイングについて、門田（2007）が分かりやすく図示しているので以下に掲載しておく。



(門田：2007)

音声モデルがない状態で、ただ原文を声に出して読むことが「音読」であり、シャドーイングとは、書かれた英文を見ずに聞こえた音声のすぐあとからおいかけるように発音していくことである。つまり、シャドーイングによってリスニングスキルの向上がはかれる一方、音読ではリーディングスキル、特にスピードが速くなるなどの効果が期待できると言える。そして、シャドーイング、音読共通で「繰り返す」練習をするため、語彙や文法などの学習事項を内在化させることができる。素読・訳読は、もちろんリスニングスキルの向上は期待できないし、リーディングスピードという点でも、返り読みをすることから、遅くなる。そして、繰り返し読む、ということは、素読の初期段階では行われていたものの、原文をそのまま繰り返して読むわけではないので、文法が内在化するわけではない。一見するとなんの効用ももたらさない素読・訳読であるが、ただ、これらの原点は、一字一句、逐語的、ということであり、原文に忠実な態度、そして両言語の構造や文法を常に比較する姿勢が育まれるという点で、直読直解を目指す前の「土台」としてはとても重要であろう。

## 6 まとめと今後の課題

以上、昨今注目されている音読と、我が国の伝統的な素読の歴史を見てきた。英語教育における音読は、その発端を考える際素読と混同されやすいが、実は英学の時代よりはじまった比較的歴史の浅いものであり、その方法も目的も素読とは異なる。そして、素読自体も、漢学の時代のものから、蘭学、英学へと引き継がれていくにつれ、変貌をとげてきたことが分かった。以下にまとめてみたので参考にされたい。

	重点箇所	目的
素読 (漢学)	一字一字を声に出し、訓点を施したものを日本語の語順に合うよう顛倒させて読み、これを反復・暗誦する	暗誦することで、 <u>文法を体得</u> 、 <u>文意の直感力を養う</u>
素読 (蘭学)	一字一字の発音、意味、日本語にする際の語順を学びこれを反復する（のちに文法に基づいた句読へ）	一文ずつ解釈していき、 <u>文法を習得し</u> 、 <u>蘭書翻訳のための素地を養う</u>
素読 (英学)	蘭学に同じ（より広義にとらえられるようになる）	会読課程に入るまでの（ <u>訳読のための</u> ） <u>自学ができる素養を養う</u>
訳読 (英学・英語教育)	一字一字の発音、意味の確認のあと、日本語の語順に置き換えるが、反復・暗誦はしない	原文を正しく理解するための基礎的な力を養う
音読 (英語教育)	原文を転倒させることなくそのまま声に出して何度も読む（暗唱）	<u>文法・語彙を内在化させ</u> 、 <u>直読直解をねらい</u> 、 <u>読書力を向上させること</u>

さらに、各時代の素読と訳読、音読の特徴を○×式で表してみた。最も特徴が表れていると思われる◎から、○、△、そして該当する特徴が全く見られないものは×で表している。漢学時代の素読については通例であった訓読みの方を採用している。（読み方が訓読みであるだけで日本語文に変換しているわけではないので日本語に訳すという点については、×を附した）

	声に出す	反復・暗誦	返り読み	逐語的	日本語に訳す
素読 (漢学)	◎	◎	◎	◎	×
素読 (蘭学)	○	○	◎	◎	◎
素読 (英学)	△	△	◎	◎	◎
訳読 (英学・英語教育)	×	×	◎	◎	◎
音読 (英語教育)	◎	◎	×	×	×

上掲の表をみると、漢学時代の素読と、英語教育における音読の性質は、顛倒して読む返り読みである点、一字一字文字をさして考えるという逐語的である点で両者は異なるが、共通点が3つもある。特に、声に出して反復、暗誦するという点については非常に似通っている。日本語の文章に置き換えない、という点でも同様である。音読は素読の復活と言われる所以である。ところが、素読から派生した訳読と音読は共通点が全くなく、正反対である。そもそも漢籍を読む際の方法である「素読」が欧文の学習にも引き継がれたわけであるが、まったく異なる文字体系の学習にそのまま適用できるはずはなく、試行錯誤の結果、訳読へとたどりついた。とくに、声に出して読むこと、反復・暗誦の欄を上から眺めていくと、漢学から、蘭学、英学、訳読へとだんだんと変貌していった様子が明らかである。そしてその後我が国における訳読の歴史は今なお連綿と続いている中で、改めて「正反対の」音読が注目されているという現況である。

コミュニケーション重視の英語教育が叫ばれる中、訳読が軽視、非難され、音読に脚光が浴びせられているようだが、今一度、素読から始まる日本の外国語教育の歴史を繙いてみることで、一字一字、原文に忠実に日本語訳を考えていくことは、初級者には必要不可欠であることが理解できる。明治のはじめに変則英語の指導を受けた村井知至も、訳読（変則英語）について以下のように述べている。

村井知至『英語研究苦心談』（1925）より

……此変則英語に依って私は本当に英語に対する大切な基礎を築き得たと思ふ。今日の英語は所謂意識なるものが重んぜられ、文章を見て、エー加減に想像的にボーっとその意味を捉へて訳そうとする癖が一般に行はれて居るが、私共の昔し（ママ）やった英文の訳し方は一字一句悉くそれに訳を附しさうしてそれを繋ぎ合はせて何とかかんとか訳して見る。即ち直訳なので全然日本語になってみないのであるが、精密に英文を研究して、その意味を補へんと努めた所は確かに此の変則英語の特長であったと思ふ。かかる読み方、訳し方は今日学生間に普く行はれる曖昧な、ボンヤリした英語の読み方訳し方と比較して遥かに勝ってゐる。 (p.7)

また、『英語研究法』（1902）を表した佐藤顯理も明治末年当時、「西洋人に就いて発音語調を研究するにも非ざれば又福沢流の如く専心に語義を研究するにも非ず」（pp.18-19）と、「似而非変則」が流行していることを指摘し、「大体の意味に通ずれば即ち可」となってきた当時の訳読法を「其読み方極めて杜撰となれり」（p.12）と非難している。

「素読」という言葉をあまり見かけなくなった英学の時代になってもなお、この言葉を使い続けた慶應義塾の福沢のメッセージは、まさに村井が言うように、「曖昧な、ボンヤリした英

語の読み方訳し方」を排し、「精密に英文を研究する」べきだということだったのである。基礎を習得していない初級者に、音読を強いて、意味は「なんとなく」分かればよい、という習慣をつけると、本当に難解な原文も所詮「なんとなく」しか理解できないであろう。読解力を養う、というのは、もちろんスピードも大切であるが、原文の真意を読み解く力こそが読解力といえるのである。これまでの歴史を顧みず、「訳読より音読」とただブームに乗って流行りのものを矢継ぎ早に採用してはいけない。音読も正しく実践されなければ百害あって一利なしである。

最後に、本稿では、明治中期ごろから昭和時代を通しての日本における音読の歴史について詳述することができなかったので、それを今後の研究課題としたい。特に、明治後期の岸本能武太の音読説は非常に興味深い。中学における英語の最高度として、「英米人に意味が明白に伝わるように音読できること」としたことから音読をどれだけ重視していたかが理解できるし、「訳読で意味が明白になってから音読をさせるべき」であるとする意見は今日における音読の鉄則となっている。彼の意見を含め、明治期の音読に対する意見がその後どのように我が国の英語教育に反映され、それが今日に至るのかを今後詳しく調べてみたい。

[参考文献]

- 安達忠夫『素読のすすめ』講談社，1986
- 和泉伸一『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』大修館書店，2009
- 伊藤嘉一『英語教授法のすべて』大修館書店，1984
- 伊村元道『日本の英語教育200年』大修館出版，2003
- 梅溪昇『緒方洪庵と適塾』大阪大学出版会，1996
- 大木俊英「Q8 シャドーイングはリスニング力を高めるのに、どのような効果があるのでしょうか」『英語教育』2012年12月号，pp.24-26
- 門田修平『シャドーイングと音読の科学』コスモピア，2007
- 片山潜『自伝』改造出版社，1923
- 川澄哲夫編『資料日本英学史1下 文明開化と英学』大修館書店，1998
- 唐木順三『現代史への試み』岡田勝明編『京都哲学撰書 第12巻』燈影舎，2001
- 岸田知子『漢学と洋学 伝統と新知識のはざままで』大阪大学出版会，2010
- 慶應義塾編『慶應義塾誌』慶應義塾誌編集部，1922
- 慶應義塾編『慶應義塾百年史 上巻』慶應義塾，1958
- 慶應義塾編『福澤諭吉全集 第一巻』岩波書店，1958
- 幸田成友『幸田成友著作集 7』中央公論社，1972
- 齋藤孝『声に出して読みたい日本語』草思社，2001
- 齋藤孝・斎藤兆史『日本語力と英語力』中央公論新書ラクレ，2004
- 佐藤顯理『英語研究法』大学館，1902
- 芝哲夫『適塾の謎』大阪大学出版会，2005
- 逍遙協会『逍遙選集 第12巻』第一書房，1977
- 鈴木寿一「Q3 入試に対応できる英語力をつけるのに音読は効果があるのでしょうか」『英語教育』2012年12月号，p.14-15
- 鈴木寿一・門田修平『フォニックスからシャドーイングまで 英語音読指導ハンドブック』大修館書店，2012
- 杉本つとむ『江戸時代 蘭語学の成立とその展開 II』早稲田大学出版部，1977
- 第一外国語学校編『英語研究苦心談』文化生活研究会，1925
- 多田房子「緒方洪庵と蘭学」『和洋女子大学英文学会誌』第18号，1984，pp.61-72
- 武田勘治『近世日本学習方法の研究』講談社，1969
- 辻本雅史『思想と教育のメディア史 近世日本の知の伝達』ペリカン社，2011
- 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 資料一』『東京大学百年史 通史』東京大学，1984
- 中直一「欧文の『素読』について」『言語文化共同研究プロジェクト2001 異文化理解教育の国際比較：多元的社会における共生に向けて』大阪大学言語文化大学院言語文化研究科，2002，pp.13-23
- 「江戸時代の外国語研究と適塾の蘭学」『適塾』第41号，2008a，pp.56-61
- 「蘭学塾の素読法と明治以降の語学教育」『適塾』第41号，2008b，pp.85-91
- 中村春作『江戸儒教と近代の「知」』ペリカン社，2002

- 沼田次郎『洋学』吉川弘文館, 1989
- 鳩山春子『自叙伝』, 鳩山春子, 1929
- 東谷保裕「Q6 音読指導の効果的な手順や教材選定のポイントについて教えてください」『英語教育』  
2012年12月号, pp.19-21
- 日野信行「現代の英語教授法から見た適塾」『適塾』第41号, 2008, pp.66-74
- 平賀優子『「文法・訳読式教授法」の定義再考』『日本英語教育史研究』第20号, 2005, pp.7-26
- 松村幹男『明治期英語教育研究』辞游社, 1997
- 茂住實男『洋語教授法史研究—文法=訳読法の成立と展開を通して—』学文社, 1989
- 「会読について」『大倉山論集』第34号, 1993, pp.97-118
- 山本祐子・中嶋洋一「進学校の生徒が、訳読式授業を支持したのは何故?」『英語教育』2005年8月号,  
pp.48-50
- 柳沼重剛「音読と黙読—歴史上どこまで確認できるか—」『大妻女子大学紀要 社会情報学研究』第1号,  
1993, pp.1-15
- 湯川秀樹『旅人 ある物理学者の回想』角川ソフィア文庫, 1960
- 吉田太郎「明治前期における歴史教育方法の研究」『横浜国立大学教育紀要』第8号, 1968, pp.123-139
- Birt, Neil W. The Effect of Oral Reading on Fluency in ESL Students *Tottorikankyo daigaku Kiyō*, vol.3,  
2005, pp.127-134
- Gurian, M. *Nurture the nature* Jossey-Bass, 2007
- Koda, K. *Insights into second language reading* Cambridge University Press, 2005
- Liu, S. Should 4<sup>th</sup> Grade ELL Students Read Aloud or Silently? Empirical Implications from Subsets of  
Data Taken from Two Large Databases *Theory and Practice in Language Studies*, vol.3, No.11, 2013,  
pp.1959-1968
- Long, M. Focus on Form: A design feature in language teaching methodology In K. de Bot, C. Kramsch &  
R. Ginsberb (Eds.) *Foreign language research in crosscultural perspective* John Benjamins, 1991
- Doughty & J. Williams (Eds.) *Focus on Form in classromm second language acquisition* Cambridge  
University Press, 1998
- 
- i 研究社 新和英大辞典第五版
- ii 前掲書
- iii 安河内哲也 「必ず英語力が付く、正しい音読10の方法—棒読みでたらめ音読に陥るな!」『東洋経済  
オンライン』2014年1月16日付けより
- iv 緒方富雄「緒方洪庵適々齋塾のこと」『日本医事新報』688号, 1935, pp.32-34
- v 「慶応」「慶應」の表記については、文献に記載されている通りとする(以下同様)。
- vi 岸本能武太「中学教育に於ける英語科の教材教程及び教授法に就いて」『英語教育史資料第1巻』1980,  
pp.73-74